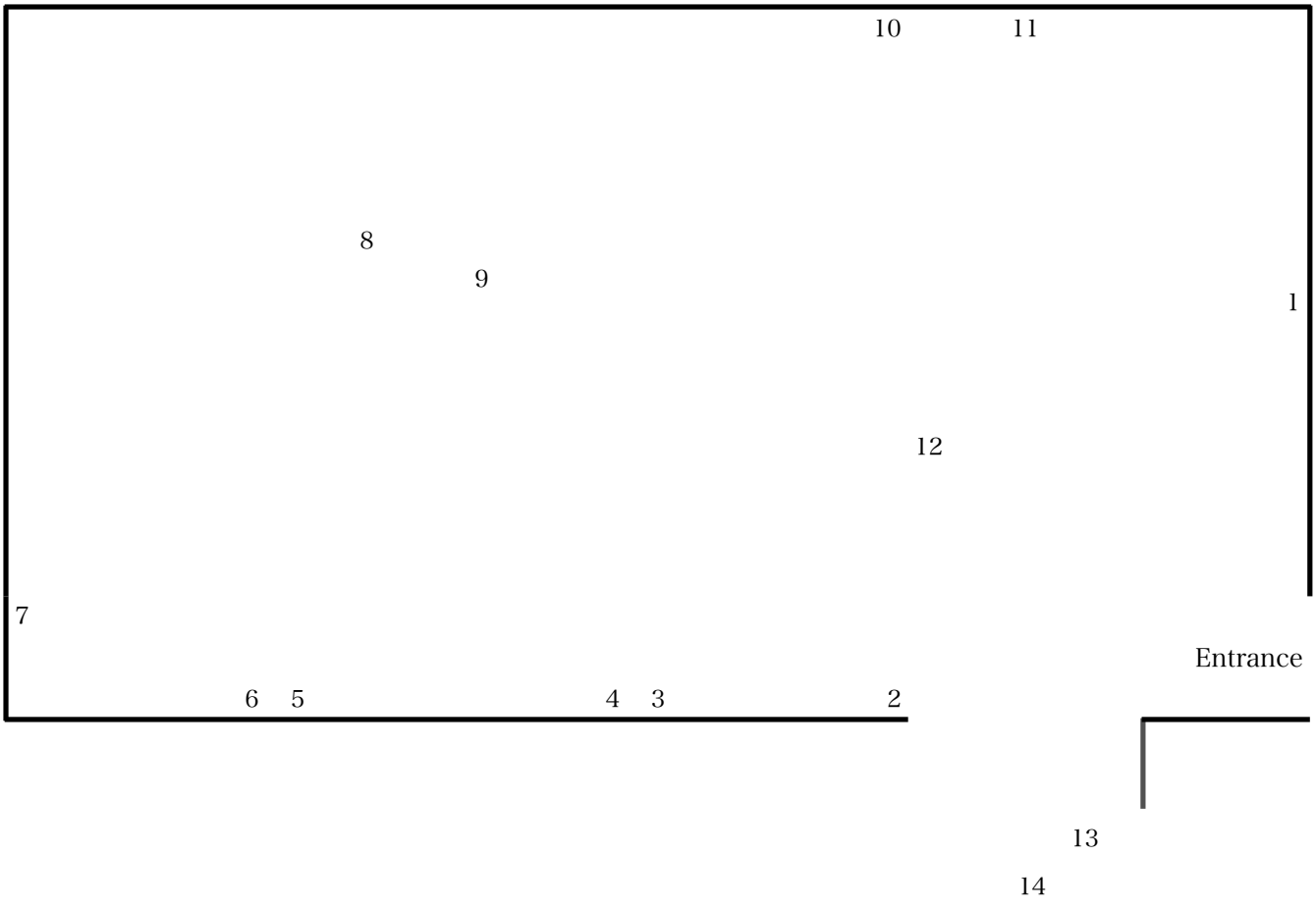
髙山 瑞展「やまびこ」 2022.4.17(sun) - 4.30(sat)



No	作品No	作品名	制作年	サイズ	素材/技法	価格(税抜)	価格(税込)
1	2202-01	くう	2022	145×150×55	樟	¥50,000	¥55,000
2	2202-02	つるはまるまるむし	2022	60×135×80	樟	¥35,000	¥38,500
3	2202-03	は	2022	110×85×45	樟	¥20,000	¥22,000
4	2202-04	は′	2022	330×250×80	樟	¥140,000	¥154,000
5	2202-05	ぬの	2022	130×85×45	樟	¥25,000	¥27,500
6	2202-06	ぬの′	2022	200×160×75	樟	¥135,000	¥148,500
7	2202-07	とんとん	2022	350×80×50	樟	¥50,000	¥55,000
8	2202-08	へのへのもへじ	2022	60×135×80	樟	¥35,000	¥38,500
9	2202-09	みんなで と ございます	2022	サイズ可変	樟	¥150,000	¥165,000
10	2202-10	て	2022	130×160×80	樟	¥38,000	¥41,800
11	2202-11	て′	2022	340×330×80	樟	¥120,000	¥132,000
12	2202-12	てーちゃんが はちみつたべてしかられて へーきへーきのんきのんきで しゅくだいれいてん あっちゃっぱ	2022	60×135×80	樟	¥35,000	¥38,500
13	2202-13	て″	2022	340×330×80	樟	¥120,000	¥132,000
14	2202-14	き	2022	130×200×80	樟	¥38,000	¥41,800

galerieH 〒103-0024 東京都中央区日本橋小舟町7-13-2F ☎ 03-3527-2545 ✉ info@galerie-h.jp

髙山瑞　TAKAYAMA midori

1993　神奈川県生まれ
2016　武蔵野美術大学造形学部彫刻学科 卒業
2018　東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻 修了

［主な展覧会］
2022　「髙山瑞-やまびこ-」展 galerieH｜東京
2021　「髙山瑞-灰色の□ □-」展 galerieH｜東京
「関根ひかり+髙山瑞 -パレオグラフィの木屑-」展 galerieH｜東京
2019　「森」展 アークライトステーション｜神奈川
「KEAT2019」展 栃木県那珂川町小砂地区｜栃木
「髙山瑞 – 余白のありて – 」展 galerieH｜東京
「とるにたらないものもの」展 桐生市有鄰館｜群馬
2018　「青の島の線分 第66回 東京藝術大学 卒業・修了作品」展 東京藝術大学｜東京
「木のシンギュラリティ #2」展 旧平櫛田中邸｜東京
2017　「木のシンギュラリティ」展 旧平櫛田中邸｜東京
2016　「2015年度 校友会奨学生 卒業制作優秀作品」展 武蔵野美術大学 ｜東京
「平成27年度 武蔵野美術大学造形学部卒業制作 大学院修了制作 優秀作品」展
武蔵野美術大学美術館｜東京
「平成27年度 第39回 東京五美術大学連合卒業修了・制作」展 国立新美術館｜東京
「平成27年度 卒業・修了制作」展 武蔵野美術大学｜東京
2015　「森に還る」展 千住芸術村｜東京
「逸脱展Market」展 武蔵野美術大学｜東京
「金城実彫刻」展 M.A.P.｜東京
「Pause」展 ギャラリースペース游｜神奈川
2014　「理化学研究所展示プロジェクト」理化学研究所｜神奈川
2013　「かえるところ」展 ギャラリースペース游｜神奈川

［パブリックコレクション］
株式会社西武ホールディングス新本社ビル ダイヤゲート池袋エントランスロビー｜東京
那珂川町小砂 よろこびの森｜栃木

［受賞｜奨学生］
「KEAT 2019」 大賞
「平成27年度 武蔵野美術大学 造形学部卒業制作」 優秀賞
「2015年度 武蔵野美術大学 校友会」 奨学生

http://bit.ly/32lh6gv
Artist Page_髙山瑞

https://bit.ly/36W5ogJ
Online Store_髙山瑞

やまびこ

今回の個展「やまびこ」では、余白に書かれる文字と図像の関係性に焦点を当てています。

柔らかくうねり、時には鋭く引かれた線たちは、それぞれ意味を持つことがあります。それはひらがなであったり、絵と呼ばれるものであったりします。

字を学び始めた幼い頃、教科書や黒板に書かれる文字をみて、「絵といっしょだー」と思いながら夢中でノートをとった記憶があります。教科書の頁には文字が書いてあり、その横に意味を示す絵がありました。往来してみることで両者を結びつけ、そこに音も加わって、私たちは文字を学んでいきます。互いに同じ意味を示すのに、かたちは全然違います。なのにたった数文字をみてそれがなにを示しているのか、どうして想像ができるのでしょう。

あらゆる類するものたちを区別する線引きは、きっとその人がこれまでどんなものをみて、どんなこと学んできたかによって判断されるのだと思います。

世界にはいつもわたしと何かがあり、わたしと誰かがいます。わたしは名前をつけて呼んで（読んで）みることでその対象を理解しようと試みます。

教科書にあるような、文字と図像のむすびつけのための往来。それは文字と図像の、どちらにもない本来の意味を求めての行為です。しかしどちらも空っぽな音の反響であり、やまびこでしかないのかもしれません。意味の所在を探す音がただ、こだましているのです。

髙山瑞